

鎌倉市今小路西遺跡出土の戦国土壌一括資料

清水菜穂

1. はじめに

ここに紹介する資料は、平成3年度に実施された今小路西遺跡（御成小学校内）第5次調査時に検出された、中世後期ないし「戦国期」と判断される3基の土壌覆土より各々一括して出土・採取された資料のうち、実測図示しえた瀬戸窯製品・瓦質火鉢・在地産中世土師質土器皿「かわらけ」の各種資料である。鎌倉市域内においては、近年市街地の再開発による事前発掘調査件数の急増に伴い、中世後期（室町・戦国期）の諸遺構・遺物に関する資料も徐々に集積されつつある。しかしながら東国の政治・経済的中心として機能していた中世前期に比較すれば、康正元年（1455）に足利公方が古河に退去した後の鎌倉は、消費都市としては明らかに衰退の一途を辿ることから、必然的に検出される遺構や遺物も寺院址や山城関係等の遺跡を除くと激減してしまうことは衆知の事実であろう。

資料的にやや乏しい現状下にあって、下記の一括遺物は当該年代の陶磁器・土器様相を検討してゆくに際して、きわめて良好な資料になり得るものと思われることから、すでにまとめられている本遺跡第1～3次調査の出土資料などともあわせて、その概要を報告させていただきたい。

2. 遺跡及び資料出土遺構の概要

調査地は、神奈川県遺跡台帳に鎌倉市今小路西遺跡として登録されている遺跡内の、鎌倉市立御成小学校内（校地南東部分）に位置しており、JR鎌倉駅の南西約300m、東辺を現在の今小路が並走し、西方は鎌倉平野西端を廻る小丘陵の尾根筋にあたる通称御成山に接している。当地域は第三紀凝灰岩による沖積地であり、縄文海進時の潮線帯、及びその後の海退により形成された砂丘の縁辺部にあたる。現在の標高は約8.5m、遺構面は古代・中世ともに5.5～7.0m前後であり、旧地形は東南に緩く傾斜していた。

当該地点においては、昭和59・60年度に第1次～3次にわたる発掘調査が実施され、中世の大規模な武家屋敷跡とその周辺の庶民居住区、古代地方官衙（郡衙）の政庁に比定される遺構群を検出しており、平成元年度には第4次調査として試掘・確認調査が行なわれている。今回の第5次調査は平成3年4月より翌年6月にかけて、前回発掘区の東側に隣

接する約3000㎡を調査したものである。検出された中世前期及び古代遺構の概略に関してはすでに幾つかの報告がなされており、小稿においては割愛する。⁽¹⁾

「戦国期」とした遺構群に関しては、中世第1面調査時に確認された諸遺構のうち、その掘り込み面が1面もしくは面上の遺物包含層より明らかに上層からなされているものや、出土遺物が第1面の年代観（14世紀後半代）より確実に新しい様相を示すものがこれに該当するが、主要遺構は以下に述べる3基の土壌のみであった。なお、「戦国土壌」の表現は用語として不適切かとも思われるが、本稿においては大雑把に応仁の乱以降を想定し、15世紀中頃～16世紀代をその対象年代としている。

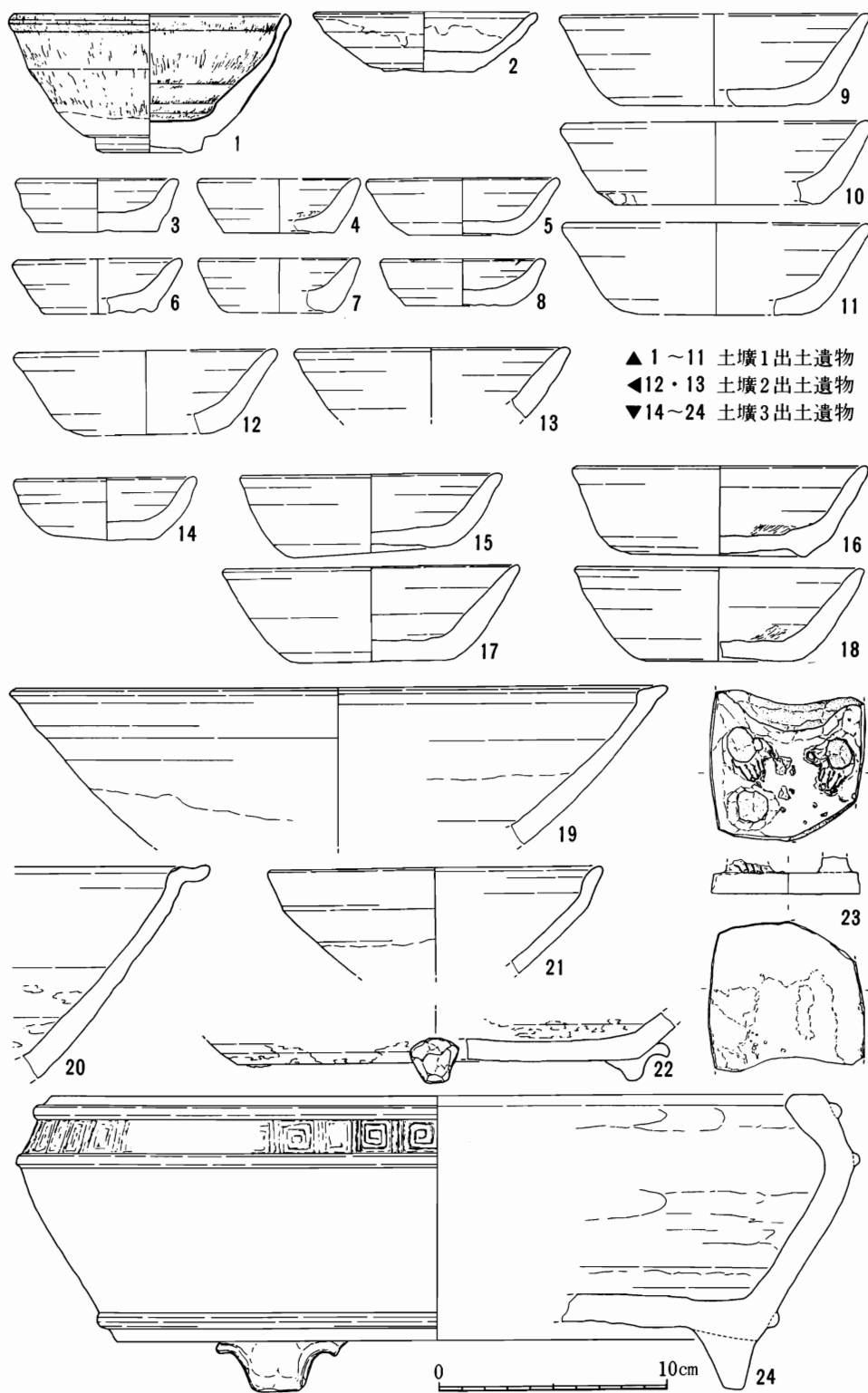
土壌1と2は調査区北西隅の第1面地業層に浅く掘り込むかたちで隣接して検出され、確認面上では1が径80cm前後、2が約60cmのほぼ円形を呈する。土壌3は、調査区北部中央付近の第1面上に確認された、いわゆる大型の方形竪穴建築址の西壁際に位置しており、竪穴の一部を切って地業層に深く掘り込む、長円形もしくは隅丸長方形の平面プランを有する土壌で、確認時点では長軸130cm、短軸90cm、深さ60cm前後を測る。出土遺物に関しては、各土壌埋土中のものを全て一括して採取したが、いずれも覆土内に明瞭な層位を区分することはできず、特に問題はないものと判断している。

3. 出土資料の検討

第1図-1～11は土壌1より出土した各種遺物である。以下に概観してゆきたい。

1は瀬戸窯の天目茶碗。破片接合により下半部はほぼ完形に近いが、口縁辺は約1/4が遺存しているにすぎない。復原実測にもとづく外口径は11.8cm前後、外底径4.6cm、器高6.1cmを測る。素地は淡灰褐色を呈して比較的緻密。黒色細粒を含み、ガス微孔僅かに生ずるが粘性は強い。焼成は概ね良好で堅緻といえよう。釉調は青味を帯びた黒褐色で、口縁部と内底面周囲は禾目様の発色、口縁上端と外面の施釉下端部分は鉄発色を呈する。釉層は厚く比較的透明度は高い。器面には鈍い光沢が残るが、内面下半には使用時のものと思われる細かな擦痕が多く認められる。胎土・成形・釉調ともに瀬戸窯の製品としてはかなり良質であろう。年代観の詳細に関しては明言し得ないが、概ね古瀬戸後期（15世紀中頃～後半）の所産と判断される。

2は同じく瀬戸窯系の鉄釉、縁釉小皿である。上半を一部欠損しているがほぼ完形。外口径9.9cm、底径3.9cm、器高2.6cm前後を測る。素地は灰褐色だが胎芯は淡灰色、器表の露胎部は鉄分によるものか褐色味が強い。黒色および白色の小石粒を多く含みやや粗く硬質。焼成は堅緻である。釉調は黒褐色～黄色味暗褐色を呈し、釉層はごく薄い失透している。一部に淡灰緑色の降灰もしくは自然釉が認められるものの、再火のためか器面の光沢はほとんど失われている。年代的にはやはり15世紀代（中頃以降？）であろう。



第1図 今小路西遺跡第5次調査 戦国土層出土遺物

3～18は「かわらけ」である。(3～11は土壌1, 12と13は土壌2, 14～18は土壌3からの出土資料) いずれも法量的には大中小に区分されるが, 各法量間の差異は不明瞭もしくは漸移的であると言えよう。小稿においては便宜上, 大皿を外口径12.0cm以上(9～11, 16～18), 中皿を9.0～12.0cm(12, 13, 15), 小皿を8.5cm以下(3～8, 14)とする。但し5と14は中皿と小皿の中間的な形態を呈している。胎土はいずれも粉質で赤色土粒, 白色粒, 海綿状骨針, 細砂粒等を多く含み, 粗くもろい。焼成はあまくやや軽い。色調は概ね赤味の強い淡橙色。多くは内底面に粗雑なナデ, 外底面には板状の圧痕が認められる。10は外面下辺に篋状工具によるケズリもしくはナデ様の痕跡が残るが, 或いはスノコ板(乾燥台)から引き剥がす際の擦痕であろうか。全体に成形および整形は粗雑, 簡略化し, 厚手で側面観の凹凸は乏しい。体部は概ね直線的に外方へ立ち上がるが, 8はやや前代の丸味をとどめ, 逆に3, 5, 12, 14, 15は口縁端部でさらに外反する傾向を示している。鎌倉の「かわらけ」編年において14世紀代に最も特徴的な形態とされる「薄手丸深」系は皆無であり, 胎土・焼成・器形ともに15世紀代から16世紀初頭にかけての, いわゆる「戦国タイプ」としてのまとまりをもつ資料であろう。

19～22は土壌3より出土した瀬戸窯系の灰釉製品である。19は大平鉢, 20と22は折縁深皿もしくは鉢, 21は平碗と思われる。いずれも小片であり復原実測による口径・傾きには疑問がのこる。素地は概ね灰白色を呈し, 白色石粒等ごく僅かに含むが比較的緻密。焼成は良好でよく締まる。釉調は淡灰緑～緑褐色, 灰黄緑色と多様。19～21は釉層中に白色不透斑多く生じてほぼ失透する。22は粗雑な刷毛塗りがなされ, 内底面の釉は鉄色のかすれが著しい。いずれも使用もしくは再火により器面の光沢は失われている。年代観に関しては, 21は14世紀代に遡る可能性があるものの, 19や20の口縁形態や22の粘土塊貼付による三脚を有する底部の形態などから, やはり15世紀中頃を中心とする時期の所産と判断されよう。

23は土壌3出土の瀬戸窯産と思われる鉄釉の狛犬もしくは獅子の底部である。一般的には狛犬と考えられるが, 前脚の指の形態や台の前辺に円形の剥離痕の認められる点が異形であり, 他の動物, 例えば猿などの可能性が高い。鎌倉では初出であり, 狛犬以外の動物像であれば窯址を含めて全国的にも例は少ないものと思われる。素地は灰褐色を呈し, 混入物含まず細かいが粉質。焼成はやや軽い。釉調は赤紫色を帯びた茶褐色で, 層薄いが透明感はない。上面から一部側面にかけて施釉され, 底面は露胎だが僅かに自然釉が認められる。器面には鈍い光沢が残るものの, 焼成不良或いは再火のためか肌荒れが著しく, 降灰やはぜた石粒が付着している。前脚の指は左右とも5本で細長く, 親指(?)は他の4本から離れてハの字に開いている。犬や獅子よりはやはり猿もしくは人の手に近い観がある。また右脚前方には円柱状の突起物が造形されていた痕跡があるが, 何を象ったものかは全く不明である。なお陶製狛犬に関しては, 瀬戸窯特産とされ, その初現は洞山窯出土

の灰釉製品で13世紀代後半の年代が与えられているが、鉄釉のものは一般に室町期以降の所産と理解されている。確実な伝世品で最古のものは名古屋市伊勢神社にある鉄釉の阿吽一對で、応永二十年（1413）の墨書銘を有する。また灰釉、鉄釉製品ともに狛犬の形態には数種あり、古期のもの、例えば鹿島神宮伝世品（15世紀初頭前後）などは細身の山犬型、黄瀬戸に近い新しい時期のものは太い獅子型となり、時代が降るにつれ姿態が崩れるようである。なお本資料にやや近似した釉調かと思われる瀬戸八幡二号窯出土の資料は15世紀後半代、同じく菊畑窯のものには15世紀末から16世紀にかけての年代観が与えられている⁽²⁾。

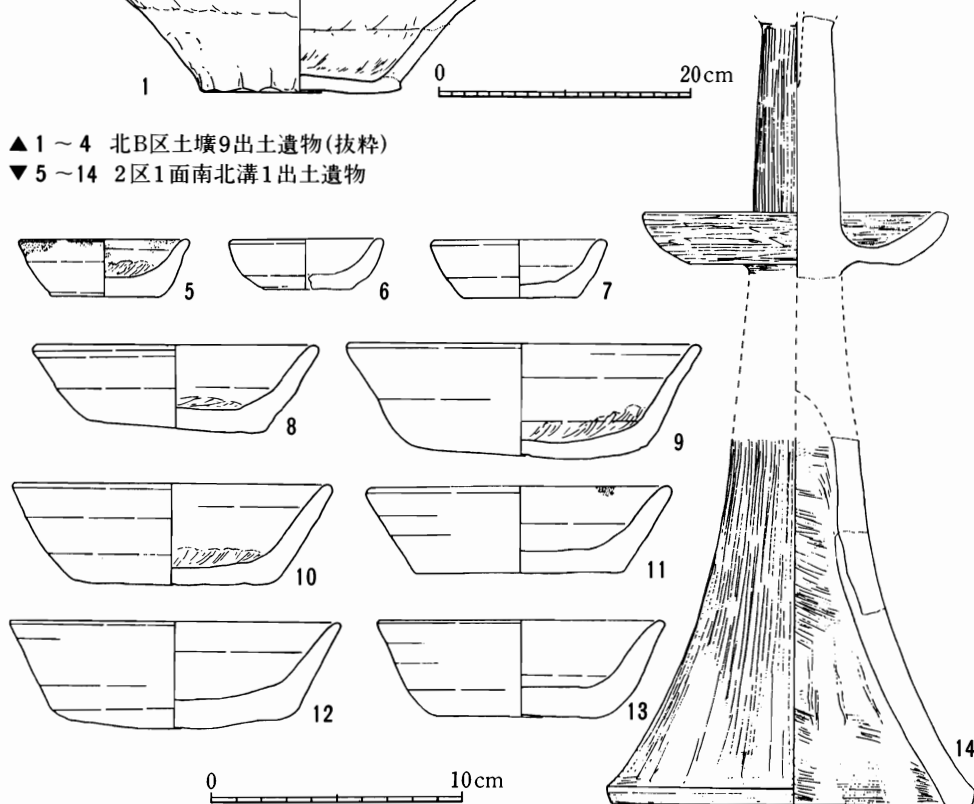
24は土壌3より出土した瓦質もしくは瓦器質の火鉢である。数破片から全体の1/3程度を復元したが内底部は殆ど欠損している。復原実測による外口径約34cm、胴部最大径37cm、体部高10.8cm、器高13cmを測る。胎土は微砂質粘土に赤褐色小礫粒、白色及び黒色砂粒、金雲母等を多く含み、かなり粗い。焼成はやや重く硬質である。器面にはおそらく磨きと炭素吸着がなされるが、再火のためか全面に肌荒れ、剥離が著しく元況をとどめていない。色調は胎芯一部が暗灰褐色の他は、全体に赤味の強い暗橙褐色、炭素吸着残存部分、特に内底面は灰黒色となる。形態は浅い鉄鉢型もしくは短胴の樽型を呈し、口縁部は内方へ水平に肥厚するもしくは張り出す傾向にある。外底部には雲形肘木様の板状三脚が付くが、脚部に1ヶ所のみ遺存し、剥離した箇所では接着時のものと思われる斜格子の刻み目（押圧痕）が認められる。外面上辺には2条、下辺には1条の凸帯が廻り、上辺凸帯間の凹帯部分には雷文が連続押捺されている。偏球状胴部に凸帯と連続スタンプ文を配する本形態は河野眞知郎氏の分類に拠れば、15世紀以降に出現するE類に比定されるものと思われるが、氏は「鎌倉の出土量は寺院や城など限られたものにな」り、さらに「茶の湯の流行に伴う土風炉の普及と軌を一にするもの」であると解釈されている。但し、本資料は凸帯をもちつつ口縁端部が内側に肥厚しており、氏の分類中F類（無文の短樽胴に水平口縁を有し、東国では15世紀以降16世紀を中心として出現するとされる一群）との中間形態とも考えられよう。なお氏はまた「京都・奈良では凸帯をもつものの口縁がすでに内方へ水平に張り出すようになる」とされており、その系譜下につながる資料である可能性もある。いずれにしても鎌倉における類品の出土例は多くはなく、凸帯間に小型スタンプ文を有する資料は裏八幡西谷遺跡や名越・山王堂跡など、無文の偏球状胴部で口縁部が内側に張り出す形態は鶴岡二十五坊跡、本遺跡の前回調査時など数例にすぎない⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

以上、各土壌出土資料を概観してきたが、前述したように鎌倉市域内においては、当該資料に関する調査もしくは出土事例が少ないために、現時点では個別の詳細な年代観を検討するには至らず、いずれも概ね15世紀代から16世紀にかけてという表現にとどまらざるを得ないであろう。



▲ 1～4 北B区土壙9出土遺物(抜粋)

▼ 5～14 2区1面南北溝1出土遺物



第2図 今小路西遺跡第1～3次調査 戦国遺構出土遺物

4. 前回調査時出土資料との比較検討

当該地点、今小路西遺跡（御成小学校内）の第1～3次調査においては、やはり戦国期（15世紀中葉～16世紀）と判断される土壌や溝状遺構が検出されており、各種の遺物が出土している。詳細は報告書に拠られたいが、そのうちの幾つかを比較資料として、ここで若干紹介させていただくことにしたい。（第2図）

1～4は北B区土壌9出土資料の一部である。1は常滑窯の大甕。肩部は角張らず、口縁の縁帯部分が大きく発達して体部壁と完全に密着している。同窯の編年案に拠れば⁽⁸⁾15世紀後半代（1450年以降）、大甕最終末期の形態と判断されよう。2は多孔質安山岩製とされる石鉢である。半球形を呈し外底部の3ヶ所に円脚を有する。口縁部は一部欠損しているが、水平方向に張り出す把手とおそらくその対面に片口を施したものとされている。鎌倉においては14世紀後半以降16世紀にかけて、少量ながら石鉢或いは石臼の出土例があり、例えば建長寺境内遺跡（昭和61年調査）においては、⁽⁹⁾第Ⅵ期第3溝覆土上層より本資料と近似した石材、形態の石鉢口縁部片が出土している。（但し当該遺構の年代観は16世紀代とのことである。）3と4は常滑窯の捏ね鉢である。いずれも口縁端部が角型に張り、さらに両端が外方へ突出する傾向にある。同窯編年案においてはやはり15世紀後半代に位置づけられる資料であると言えよう。

5～14は2区1面上で検出された、上層（戦国期）の南北溝1より出土した資料である。⁽¹⁰⁾5～13は「かわらけ」で、報告書によれば「粉っぽい胎土で、焼成もあまり良くな」く、深く丸味のある前代の側面観を若干とどめていると思われる資料6を除いては、いずれも「口縁に外反傾向を見せ、厚いつくりで、内底のナデが2～3回にまで簡略化されている」との観察がなされており、先に述べた第5次調査の土壌1～3出土資料とほぼ同類、同形態と判断することができよう。14は瓦器質の燭台である。器面は炭素吸着により黒灰色ないし青黒色を呈し、軸部には縦位の、受皿部には横位の細かな磨きが施されている。本遺跡においてはその類品として前掲した北B区土壌9、及び南谷屋敷地区1B面上より（上層からの混入品と解釈されるが）脚部片が各1点ずつ出土しているが、これら3点（当遺跡地）以外の鎌倉における出土例は殆ど確認できていない。河野氏の分類⁽¹¹⁾に拠れば本資料は「瓦器質異形品－G類」として、ごく少量ながら先に触れたF類と共伴する傾向にあるとされている。

以上、各種遺物の形態や年代観等を考慮すると、これら前回調査時の資料と先に挙げた第5次調査時の土壌一括遺物とは、概ね同時期の資料として把握することができよう。

5. おわりに

小稿においては今小路西遺跡における「戦国期」の出土資料に関して、簡略な紹介をおこなったものである。同遺跡地内ではあるが100～150m前後の距離を隔てた数地点から、ある程度のまとまりをもつ遺構群と遺物が検出された事実は、明瞭な建物遺構は確認できていないものの、当該地域が中世前期のみならず後期に到っても、居住もしくは生活空間として存続していたことを意味していよう。無論町割や居住形態、人口等にかんがりの変動があったことは十分考慮すべきであるが、現時点での詳細な検討は不可能と言わざるを得ない。すでに述べたように鎌倉市域内における当該年代の資料は量的に未だ十分でなく、年代観を含めて詳細な検討には至らず雑駁な内容に終始した。今後の資料増加を待って、「戦国期」の鎌倉における諸様相―「かわらけ」の細分類および編年化を中心として、常滑窯や瀬戸窯製品の器種構成、在地産とされる火鉢類や各種瓦器質製品との共伴関係等に関して再検討したいと考えている。先学諸兄の御叱正、御教示を仰ぐ次第である。

なお小稿作成にあたっては今小路西遺跡第5次発掘調査団より幾多の御協力を賜った。末筆ながら記して感謝申しあげたい。

註・引用文献

- (1) 河野眞知郎 1992 「鎌倉市今小路西遺跡（御成小学校内）『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』神奈川県考古学会
- 宮田 真 1992 「今小路西遺跡の調査」『第2回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』鎌倉考古学研究所
- 清水 菜穂 1991 「今小路西遺跡の調査」『鎌倉考古』No.20鎌倉考古学研究所
- 清水 菜穂 1992 「今小路西遺跡の調査」『鎌倉考古』No.21鎌倉考古学研究所
- (2) 檜崎 彰一 1977 「瀬戸鉄釉狛犬」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館
- (3) 河野眞知郎 1992 「鎌倉の搬入土器と在地土器」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会
- (4) 1981 「裏八幡宮西谷遺跡」『神奈川県埋蔵文化財センター調査報告書』
- (5) 1990 『名越・山王堂跡発掘調査報告書』山王堂跡発掘調査団
- (6) 大三輪龍彦 1967 『伝鶴岡廿五坊址の発掘』
- (7) 1990 『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- (8) 中野 晴久 1992 「常滑窯」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯検討のための「会津シンポジウム」発表資料
- (9) 1991 『巨福山建長寺境内遺跡』建長寺境内遺跡発掘調査団
- (10) 註(7) P.18
- (11) 註(3) P.161